

# 宗教と因習に依らない人間形成

## —哲学者オルテガの模索—

木 下 智 統

キーワード：カトリック保守主義、宗教、自由教育学院、学生館、オルテガ

### 1. はじめに

スペインの再生に尽力し、社会的に大きな影響力を誇っていたホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset 1883-1955) は、思想家、哲学者、そして政治家としても活動するなど、多面的な顔を持つ。その思索は、祖国のみならず、ヨーロッパ文明の全体をも視野に入れた広汎なものとして知られ、哲学、思想、歴史学、社会学、文学、そして芸術など、多領域に亘っている。オルテガを20世紀のスペイン、ヨーロッパを代表する知性として列挙することに疑いはない。

彼のこうした輝かしい功績とは裏腹に、オルテガが生きた時代のスペインはかつて栄華を誇った絶頂期からは想像を絶するほどの状況にあった。そして、その混迷の結果としてたどり着く、スペイン内戦とその後のフランコ独裁政権は、スペインの多くの知識人たちを徹底して葬り去るものとなった。あるものは他国へと亡命し、あるものは祖国に残って命を落とした。たとえ生きながらえたとしても激しい言論封殺の下、知識人としては絶命に等しい状況にあった。だが、こうした状況にまで転落する直前まで必死に国家の危機と向かい合った人々がいた。没落期を迎えたスペインにおいて、冷静にその原因へと目を向け、祖国再建の道筋はいかにして達成されうるかを模索する活動が盛んとなったことは、国にとって一筋の光明であった。その代表的な存在が、米西戦争に敗北した年号を取って名付けられた「1898年の世代」と呼ばれる知識人たちである。

オルテガはこうした知識人たちから多大な影響を受け、スペインを崩壊から再生へと導くべく、必死にその道筋を模索した。その結果、思想面においては、1930年に先駆的大衆社会論の書として知られることになる『大衆の反逆』を刊行し、社会活動においては、1931年に政治家として国家の機能と方針の策定に関わっていく。だが、こうした活動以外にもオルテガは若者たちの人格形成に直接的にかかわっていた。それが1910年に国の公的施設として設置された「学生館」であった。学生館はイギリスのイートン校などを代表とする、パブリックスクールの基本理念をもとにして創設された。そこには国の将来を担う能力をもった多才な若者が多く集い、互いに刺激を与え合う日常を過ごすと同時に、それぞれの分野の第一線において活躍していた多数の知識人たちも若者たちと寝食を共に

した。オルテガ自身も多数の講演を行うだけでなく、若者たちとの直接的な対話を重ねることによって、国家の危機的状況を打開する人間の育成に取り組んだのである。こうした時代背景の下、当時の教育機関、そしてその教育機関の理念とオルテガの思想との関連性を検討することで、特定の宗教を排した形で人間形成について検討していきたい。

なお、本論考で用いる自由主義とは単に国内外を問わず、特定の宗教からも因習からも影響を受けず、人間形成に取り組むことを可能にする環境と思想を指し、保守主義とは、特にスペインのカトリック保守派、すなわち伝統的なカトリック思想に重きを置いた人間形成を図るべきとする思想を指している。

## 2. 20世紀初頭のスペインー人間形成の新たな模索

スペインでは20世紀初頭まで教育は一部の知識人層において享受されるものであり、一般市民にまで広く行きわたっていなかった<sup>1</sup>。すなわち、教会と世俗の間に教育面で大きな溝が存在したが、古くから修道会が社会的指導者の教育を司ってきたことからこうした状況に変化は生じなかった。ただし、こうした状況はスペイン特有の現象ではなく、キリスト教聖職者が社会的な知識人層の中心を担ってきたヨーロッパでは当然のことであった。しかし、他のヨーロッパ諸国において改革派が台頭し、革新的な機運が社会を包み込む中、聖職者がカトリックで占められていたスペインでは保守的な立場が貫かれ、社会の発展を大きく阻害することになった。加えて、かつて栄華を誇った国力は衰退の一途をたどっていたことも他のヨーロッパ諸国と足並みを揃えることを可能としなかった。

このような社会状況に対してスペインの主流を占めていた聖職者達は改善を志向することなく、現状について危機感を持つことはなかった。民衆に広く教育の機会が与えられ、思考する意思を持てば、自ずと保守的な傾向が薄らぎ、自然と反教会の流れへと突き進むことが想像されたからである。結果として、社会の発展よりもイスラーム追放によって再び取り戻した教会の価値観を守ることに終始したことになる。

しかし、スペインにおいても大衆社会の到来と他のヨーロッパ諸国との文化水準の差が明確になるに連れ、いよいよこうした状況を打破すべく、ようやくスペインにおいて公教育制度が整備されることになるが、以後、その内容は二転三転することになる。その分岐点を端的に断言するならば、カトリックの価値観と教育のどちらを優先させるかに尽きる。言い換えれば、世俗的、普遍的な教育を志向するのか、それとも聖書に根差した世界観を教育の根底とするのかという二択である。国民の大部分がカトリックであることを考えれば、人格形成を含めた教育がカトリックの下で行われることは理想的な形と言えるかもしれない。ただし、先に挙げたように、それが社会的な発展を妨げることにつながるのであれば現実としてそぐわない上に、実際に大きな障害となっていることが明らかな状況であった。すなわち、スペインにおいては19世紀の段階になっても、教育面における「理性と信仰の調和」が問題となっていたことになる。公式な形で教会から教育を分離し、制度化した1812年<sup>2</sup>から半世紀も経たない1857年には、新たな教育法が制定され、カト

リックに反する教育内容を展開した教育者たちが公式に学問の場から次々に追いやられた。公教育の在り方を巡って、抜本的な教育改革が遅々として進まない現状、加えて教会と密接に結びついた政治が大学内部に対して公然と圧力を加え、教員の追放が日常的なものとなっていたことに、当時、マドリード大学の教授であったフランシスコ・ヒネル・デ・ロス・リオスは抗議を続けるが、ついに彼自身も大学を追われることになった。

「大学問題」と言われるこうした事態<sup>3</sup>は、教会が再び影響力を取り戻したことを明確に意味した。一方、追放された教育者たちは、日々、変化する制度に影響されることなく、安定と長期的展望に立つ教育の実現、まさに人間形成の根本を考慮すれば至極当然な環境の整備を模索した。ただし、反宗教を標榜するのではなく、あくまでも他のヨーロッパ諸国で行われている当たり前の教育を目指してのことだった点は注意を要する。このような社会の状況を背景として、1876年、「自由教育学院」(Institución Libre de Enseñanza)と命名された私立学校が先に挙げた、ヒネル・デ・ロス・リオスを中心としてマドリードに設立されることになる。

自由教育学院は社会における不毛な議論に加味せず、一般的な教育機関とは一線を画した教育を推進するために独自のカリキュラムを策定した。ここでの教育の目標はすべての人々に宗教に依らず、政治的な影響も受けない自由な環境において人格形成を全うすることであった<sup>4</sup>。このような理想を掲げた自由教育学院は1936年のスペイン内戦勃発による閉鎖、そしてその後、1940年の解散に至るまでおよそ60年ほど運営されることになる。

自由教育学院は設立当初、大学教育に関わる教育者たちによって運営が開始されたことから公立大学に代わる大学を目指した。政治に左右されず、国家的な権威からも影響を受けない自治的な環境において高等教育を施す機関、これが設立当初の理念であったが、この理念は数年の間に変更が加えられ、初等、中等教育を対象とする形に切り替えられた。これは先に挙げた大学を取り巻く環境が変化し、追放の憂き目にあってきた教育者たちが、次々に大学へと回帰したことや、そもそも私的な教育機関のため大学としての学位を授与できなかったことが原因であった。だが、この転換によってむしろ自由教育学院はその存在意義を高めていくことになる。大学教育の年代では、人間形成はむしろ一定程度の完成をみる段階となっているが、初等、中等といった子供たちを対象とするならば、現代教育の影響を完全に分断した教育の実践が可能となる。それこそが真に自由な教育の出発点ととらえ、それまでには存在しなかった独特な教育方法を推し進めることになった。暗記による知識の詰め込みを教育と定義するのではなく、個々の才能を伸ばすことこそが教育であると定義し、早い段階から特定の職業人を作り出すことを是としなかった。同時に子供たちには他者に依拠しない、自然に醸成される自主性を育むため、試験等を廃して、従来からあった他者との競争によって自らの立ち位置を把握する制度を取り除いた。また、遠足や旅行を通して、自然、歴史、その土地の人々に接する機会をつくることにより、文字のみに頼らない教育を実践するとともに、共同生活を通じた社会性の体得を目指したのである。これらはすべて当時のスペインとしては画期的であったが、加えて最も特

徹的であり、議論を呼んだものとして、特定の宗教に依らない中立的な教育が挙げられる。

先に述べた通り、この時代においてカトリックと教育の関係は、宗教が人格形成、特に道德面に関わることから常に議論の対象であった。国民の圧倒的多数がカトリックである国内において、宗教色を完全に排した教育の是非はその教育目的がどれほど崇高であろうとも理解は難しい。事実、自由教育学院には保守的な立場、原理主義の立場からは絶え間ない糾弾が行われた。彼らにとっては宗教に依らない中立的な教育が問題であったことに加え、自由教育学院が男女共学であったことも大きな問題であった。これらの問題について理解はさほど難しくない。なぜなら、そもそも完全なる中立とはいかなる状態を指すのかは実証が極めて困難である。ましてやそれが教育という絶え間ない日々の蓄積において、ほんのひとときでも完全に中立性が保たれているかどうかは子供たちの親にとって気がかりになる。また、宗教に依らない教育というものが一体どういう教育であるのかという点も明確に想像がつかない。親たちの世代において教育とは一様にしてカトリック教会、修道会がその役割を担ってきたからである。

そして、男女共学についても保守的な立場の人々にとって深刻な論点を孕んでいた。一つは男女が共に同じ空間で日常を過ごすことに対する懸念である。保守的であれ、原理的であれ、カトリックを篤く信奉する立場にとって、このことは道徳に反するという見方において議論の余地はない。もう一つは男女の役割をどう捉えるかという観点である。現実的な視点で言って、カトリックが男女平等をその精神として貫いてきたとは到底言い難い。福音派においては女性の聖職者は認められているものの、カトリックにおいては明確に序列ともいべきものが存在し、教会において儀式を執り行うことは男性の聖職者に限られているためである。男性には男性の、女性には女性の役割があるということになるのであろうが、こうした状況は見方によっては現代で多用される性差別、男女差別といった主張へとつながることになる。事実、スペインにおいて男女が同等の権利を有することは、件の自由教育学院が新しい教育として男女共学を理念として掲げ、その確立を目指してからもさらに長い時を要した。

自由教育学院が提起したこうした問題はその出発点としてカトリック保守層の価値観に対する一種の挑戦とも言えるが、誤解が生じてはいけない点として、彼らは宗教を否定するわけでもカトリックの瓦解を目指したわけでもなかった。自由教育学院の教育者たちもカトリックが大部分であったことからこうした見方は成立しない。彼らが見据えていたものは、単に宗教と社会を両立させながら国家が発展していくためには、カトリックがもたらす弊害を取り除いた教育を行う必要性を強く確信していたためであった。

### 3. 人間形成のさらなる発展と挫折

自由教育学院が国内の教育の向上を目指して奮闘するもその活動は設立当初からあくまでも私的な活動であったため、波及効果は限定的であった。すでに見たように自由教育学

院が設立された時期は大学の教員が数多く教育の現場から追放されるなど教育を取り巻く環境が非常に混乱した時期であった。そうした状況が徐々に緩和されると教員たちは第一線へと復帰し、再び人間形成という命題に正面から取り組むことになる。だが、実際に教育を巡る環境整備が進んだというよりは国の情勢がさらに悪化したため、教育を巡る議論に注力できなくなったと言ってよい。すなわち、1898年の米西戦争の敗北によって国全体に濃い霧がかかり、個々の問題に向き合うよりも国としての方向性の喪失という事態にどう対処するかが比肩することができないくらい大きな問題としてのしかかってきたのである。スペインはどうあるべきか、という議論が国を挙げて交わされる一方、他のヨーロッパの国々と比べ、文化的に立ち遅れた状況は誰の眼にもはっきりとしていたため、早急な改善が望まれた。

こうして国としての在り方が明確に定まらない中、周辺諸国に文化水準の面で追いつくことが急務となった。その結果、1907年に学術拡大委員会(La Junta para Ampliación de Estudios)が設立されることになる。先の自由教育学院が初等教育の段階から少しずつ教育の芽を育んだことに比べ、学術拡大委員会には時代背景から他国の文化を国内の発展に直接的につなげることが急務であった。文化水準の低迷は敗戦を経て、国家的な危機と認識され、このような状況においてはもはや教育を巡る問題も国内だけで解決の道筋を求めることは困難との見解に国として到達したためである。そのため、学術拡大委員会は公的機関として設置され、国外の高い文化水準を身に着けた優れた人材をいち早く国に供給する使命を帯びた。すなわち高等教育を受ける学生たちを国外に送り出すことと、国内にいる学生たちには、国外から呼び寄せた有識者によってその高い文化水準を吸収させることを目的とした。

この段階においてスペインの教育制度はようやく教会の影響から脱したように見えるかもしれない。スペイン国外への頻繁な人の移動はカトリック色が非常に濃いスペインとしては他宗派の影響を完全には排除できないためである。だが、学術拡大委員会が切迫した国情を反映して創設されたことを考えると長期的な展望に立つ教育制度の抜本的な設計が開始されたとは言えず、むしろ緊急避難的な一時しのぎの政策に他ならない。今日的な視点から見れば、国が混乱していたことを示す一つの現象とも言える。それは、教育が多大な時間を要するため、長期的な展望に立てば、初等教育から制度設計を行う必要があることが明らかであり、また、高等教育に限らず、幅広い職種、世代にわたる教育が行われなくては国の文化水準を引き上げることはできないためである。事実、学術拡大委員会が行った政策は一部のエリート層にのみ適用され、すでに恵まれた環境にある層をさらに優遇したという点で批判を浴びた。ただ、国の情勢を考慮すれば、こうした声に耳を傾けられるような状況ではなかったことは明らかであった。また、一般の人々に教育が行きわたるまでには途方もなく長い時間を要する上、彼らがその必要性を真摯に認識していたかどうか疑わしいと言わざるを得ない。広く一般にその認識が共有されていれば、もっと以前から国民の声として是正が求められていたはずだからである。詰まるところ、国の危機と

言えども、その危機に向き合い対処を模索する者とそうでない者とに分かれる。当時のスペインが取れた選択肢は危機に向き合い対処を模索する者に国家の命運を託すことであった。それが一部のエリートのさらなる育成という政策に特化した理由であった。

このように見ると、オルテガの大衆論の根幹を成す少数者と大衆との関係が当時のスペインにおいてそのまま見て取れるが、こうしたことはスペイン固有の事態ではなく、危機に瀕した国であれば同様に辿る道筋ではないだろうか。いずれにしても、学術拡大委員会の至上命題が国外の高い文化水準の導入であったことを考えると、可能な選択肢の中から抽出できるものを愚直に実践していったに過ぎない。だが、それらは具体的な成果として徐々に認識可能となっていく。最も中心となった政策である高等教育を受ける者たちの国外への派遣によって、ヨーロッパを中心として多くの若者が現地で最先端の学問を吸収し、その成果を祖国の文化水準の発展のために余すところなく注ぎ込んだ。学術拡大委員会は彼らが帰国後にその知識と経験を伝達する場として様々な施設を設置した。

長きにわたって内向きで保守的な傾向が色濃くなっていたスペインが、久方ぶりに国外へと人を送り出す潮流を生み出したことは、派遣される若者には使命感を、その活動を知った国民には、国家の再生を感じさせたのではないだろうか。

一方、学術拡大委員会は国内に留まった若者たちへの教育も怠らなかった。国内においては高等教育に限らず、新たな模索として中等教育の段階からカリキュラムの見直しを行い、実験校を設置して導入を検討した。幅広い世代で教育改革を進めようと模索した現れである。だが、基本的な発想として高等教育を受ける層が中心であったことからこうした中等教育への広がりには時間を要した。学術拡大委員会がまず取り組まなくてはならなかったことは、先に述べたように、国内にいる若者たちに国外から呼び寄せた有識者を通して、その高い文化水準を吸収させることであった。同時に、国外に送り出した学生たちがその成果を披露する場も必要とされた。こうした目的を叶える施設として設置されたものが「学生館 (Residencia de Estudiante)」であった。

1910年、学術拡大委員会はイギリスのイートン校などを代表とするパブリックスクールの基本理念をもとにして学生館を創設した。そこでは大学進学のためにマドリードへと上京してきた学生たちに高度な人間形成と知的探求の場を提供した。学生館には自由教育学院が当初、目指していた自由主義に基づいた高等教育の実践を行うべく、卓越した教員たちによって研究指導が行われ、またそうした指導が可能となる図書館などの附属施設が整備されていた。こうした環境が広く社会に伝わるようになると、学生館は自由教育学院が目指す教育理念を対外へと知らしめる役割を果たした。そして、崇高な理念に共感した多才な若者がさらに多く集まり、生活を共にした。

こうして単なる学生寮とは明らかに違った空間で教員、学生入り交じっての研究、論戦を通して、肉体的にも精神的にも高度に磨き抜かれた人材が育成されていった。その目的は単なるエリート教育というより、国難ともいべき状況に立ち向かう人材の育成がスペインにとって逼迫した課題であったことを考えると切実な国情を反映してのことであっ

た。ただ、すでに見た通り、国主導の保守的で旧態依然とした人材育成は度重なる教育を取り巻く混乱により、こうした理想を実現する以前に、その方向性を定めることもままならない状況にあったことから、自由教育学院を構成する教育者たちによって達成されることになったのである。すなわち、教育の現場から追放された人々によって、真に必要な教育が遂行されたことは何とも皮肉な事実として歴史に記憶されることになる。

ところで、自由教育学院で重視された文化活動の理念は、学生館においても同様に重視された。学生館では研究旅行、演奏会、講演といった文化活動が頻繁に行なわれ、特に評判となったのが講演であった。講演は学生たちが多くの著名人と接することによって、知的刺激を享受できるよう意図され、国の内外を問わず、各々の分野の第一線で活躍する著名人たちを招いて行なわれた。講演を行なった著名人の一部を挙げるならば、スペイン国内では、哲学者ミゲル・デ・ウナムーノ、詩人アントニオ・マチャードをはじめとする、いわゆる「1898年の世代」<sup>5</sup>と称された面々、無論、オルテガ自身も多くの講演を行った。また、スペイン国外では、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン、日本でもキュリー夫人の名で親しまれている物理学者マリ・キュリー、20世紀最高の物理学者と評されるアルベルト・アインシュタイン、イギリスの作家ハーバート・ジョージ・ウェルズ、ロシアの作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキー、イギリスの経済学者ジョン・メイナード・ケインズなど、当時の時代を代表する最高の叡智が学生館を訪れ、講演を行い、学生たちと議論を交わしたことは驚嘆以外の何物でもない。こうした知性たちから薫陶を受け、後に世界的な名声を博す者に、映画監督ルイス・ブニュエル、詩人ガルシア・ロルカ、画家サルバドル・ダリなどが挙げられる。

だが、忘れてはならないことは、ヨーロッパ各国が徐々に発展を遂げていく中、政治的にも社会的にも混乱した状況にあったスペインにおいて、自由な教育を理念として掲げ、その思想に共鳴したからこそ国の内外を問わず、これほどの逸材たちが学生館に集ったことである。このように見れば、学生館は単にスペインにおいて最高の教育を提供する機関という位置付けよりも、ヨーロッパ最高水準の教育を提供する機関の一つとして捉えることが適切ではないだろうか。

さて、学生館のこうした「成功例」を見ると、学術拡大委員会は、国家の危機と公的な機関という両面の特性を活かして、実に短期間ながら国の内外に目を向けた取り組みを推進していったと言える。しかし、学術拡大委員会が国の文化水準を引き上げるために様々な政策を推進すればするほど、そしてそれらが機能して重要な役割を担えば担うほど、スペインの伝統がこうした動きを封じ込めようとするのである。学術拡大委員会の取り組みは公的機関であったことから政治の場でその動向が幾度となく議論されたが、その議論の場に引きずり出した存在はカトリックの保守派であった。他国の文化が国に到達することに対するアレルギーが国家が危機に瀕しているという事実よりも段々と力を持つようになった。無論、保守派は国家が崩壊しても構わないという考え方ではなく、国家の伝統を重んじた道筋で解決を図ろうという主張であったが、幾度となく成功しなかった歩みを再

び進めることを意味するため、真に具体性のある政策が存在したわけではなかった。結局、スペイン内戦を経て、学術拡大委員会は廃止され、スペインは保守的なカトリック教育へと回帰を果たすのである。

#### 4. オルテガの思想と学生館における活動との関連性

ここまで学術拡大委員会の閉鎖までをもってスペインの教育を取り巻く環境について検討してきたが、ここからは特定の宗教に根差した教育からの脱却という学生館の理念と特定の宗教に依らない人間形成の実現を目指したオルテガの思想との関連性について考えてみたい。

すでに検討してきたように、自由主義教育を掲げた学生館の存在はスペインにおいては大きな試みであった。それは長い伝統に対する挑戦とも言える一方、切実な国情を反映した救国行動と言えるだろう。そしてこうした理念に賛同して、この機関で主要な理事<sup>6</sup>として運営の任に当たっていたオルテガは、内戦が勃発するほんの数日前まで若者たちとの対話を続けていたことが明らかとなっている。国を二分する内戦へと至る状況にあって、オルテガはどちらの側にも与しなかったため、両方から命を狙われる立場にあった。そうした危険を顧みることのない行動からも、学生館に対する彼の強い思い入れがうかがえる。

それではオルテガはどのような思想をもって学生館で活動したのであろうか。無論、思い入れだけでなく自由主義教育を標榜する学生館の理念と思想的に一致する箇所がなくてはならない。ここでまず大前提として据える必要があるものは、すでに見てきたようにスペインの国情である。オルテガは瓦解への道程をたどりつつあるスペインの現状に対し、著書『ドン・キホーテに関する省察』で「私とは私自身と私を取り巻く環境によって成り立つ。もし私がそうした自分というものを構成する環境を救おうとしないのであれば、私を救うことなどできようはずもない」<sup>7</sup>、という命題を提示した。すなわち、スペインの現状を変え、再生へと転じるには、人々が自ら変化を求める必要があり、それ以外に解決の道はない、との結論に至るのである。だが、一般大衆にとって変化と言っても、具体的にどのような行動を取るべきなのかという見当を付けるには、当然ながらそれを思考するだけの能力や正しい判断を下す価値観が必要となる。また同時に、変化を求めるには現状の分析が欠かせない。これなくしては、どういった状況から「変化」するのか、そしてどの方向に向かっていくべきなのかを明確にすることはできない。こうした点について、オルテガはまず、『無脊椎のスペイン』で、スペインとはそもそも一体何なのか、スペインとはどうあるべきなのかという始点を定め、現状へとつながる考察を展開した<sup>8</sup>。これは国の崩壊を前にしてその原因を分析し、対処を考えるという極めて自然な発想の順序で取り組むことにより、国民の皆が等しく理解しやすいよう配慮したものであった。そして現状の分析を終えれば、次なる目標は思考する能力と正しい判断を下す価値観を大衆が有することであった。特定の分野だけに偏ることのない均衡のとれた包括的な教養、スペイン

内にとどまることのない視野の拡がり、そして最先端の学問を紹介することによって人々の意識を高い次元へと向けさせることを意図して、『西欧評論』<sup>9</sup>をはじめとする様々な著作を出版していくのである。このように見ると、オルテガの思想家としての活動と学生館の理念はスペインの再生という大きな目標に向かっていったことが明らかである。

さて、こうした前提に加え、ここでは、「少数者」、「一般教育」、そして「ヨーロッパ統合」について取り上げ、活動との関連性について指摘しておきたい。これらはいずれもオルテガの著作において述べられてきたキーワードであるとともに、オルテガ思想の根幹にかかわる代表的なものである。

オルテガの名を最も広く世に知らしめた、『大衆の反逆』<sup>10</sup>では、人間を「少数者」と「大衆」とに分け、「一方は、自分に多くのことを課して困難や義務を負う人びとであり、他方は、自分にはなんら特別なことを課すことなく、生きるということがすでにある自己をたえず保持することで、自己完成の努力をせずに」<sup>11</sup>ただ生きる人々と定義した。つまり、社会とは少数者と彼らによって導かれる大衆の両者によって成立しているため、この牽引役である少数者をいかに育成するかが国の未来を左右することになる。ただし、オルテガの定義する少数者とは階級的な区別ではなく、精神的な区別であることは注意を要する。この点は彼が一般大衆に向けて教育の機会を提供していたことから明らかである。

そして、そうした少数者が当然、兼ね備えるべき資質として偏見に依らない高い水準の教養が求められる。オルテガは、実利のみを追い求める近視眼的な学問の追究、および専門教育に偏向した学問の追究が、本来の大学の使命からいかに逸脱したものであるかを『大学の使命』で述べている<sup>12</sup>。この意味で、学生館で行われていた学的探求はまさに専門主義に陥ることのない幅広いものであり、一般教育を重視したオルテガの思想と一致する。

また、一般教育に限らず、オルテガが重視したものは祖国以外からの文化を積極的に吸収することであった。これは当時のスペインが陥っていた閉鎖的な考え方とそこからもたらされる弊害が国家の危機につながったためである。このため、先に挙げた『大衆の反逆』の第二部<sup>13</sup>において現代の欧州連合に比肩するヨーロッパ統合論を展開し、他の国々とのつながりの重要性を説いているが、この点も学生館で行われた様々な学的探求と一致する。

すでに見たように、学生館には多才な若者が多く集まり、知識人との密接な環境が可能とする論戦を経て、高度に磨き抜かれた人材が育成された。また、国の内外を問わず、第一線で活躍する多くの著名人を招いて講演が行われることにより、彼らの視野に世界という拡がりも与えた。このように見れば、学生館で行われた人間形成は、正にオルテガの思想と一致していると言える。

他方、こうした思想は、当時のスペインの保守主義から見れば伝統を打ち壊す思想である。優れた少数者とは教会や修道院を通して作られるべきであり、その任にあたるのは当然、修道士でなくてはならない。また、幅広い一般教育も進化論をはじめとしてキリスト

教の価値観に疑念を抱かせる内容であってはならない。そして、改革派の存在しないスペインにおいて他国とのつながりを重視すれば、カトリック一色の現状に変化が訪れる可能性が芽生えてしまうことになる。こうしたことから、オルテガに対しては反教会主義者との批判が多くなされたが、自身の思想を追求した形が学生館との理念と一致したのか、それとも反教会を追求したために一致したのか。本論考では、彼の著作を元に学生館の理念との一致を指摘したが、オルテガが宗教を主題とした著作を残していないため、オルテガと宗教に関する点には未だ明らかになっていない部分が多い。だが、オルテガが展開した大衆論や教育論では人間形成の重要性が訴えられ、実際に自由教育を標榜する施設において若者たちの育成に取り組んでいたことは、結果として、特定の宗教を排した形での人間形成に重きを置いたことに変わりはない。

## 5. 結論に代えて

本論考では、20世紀初頭のスペインにおける社会状況と各教育機関の理念、そしてその根底で潮の満ち引きのごとく行われる自由主義と保守主義のせめぎ合いの間で、特定の宗教に依らない人間形成を模索して、実践的な活動を行ったオルテガについて検討を行ってきた。その中で、オルテガの理念と自由教育学院や学生館で行われていた外の世界に開かれた自由な教育という理念とが一致していたことを確認した。すなわち、オルテガにとっては自らの思想を体现できる場として学生館を捉え、そしてそれが故にここでの教育に熱心に取り組んだと言える。だが、残る課題は、オルテガがどのような思想の下、この施設で活動したのか。また先に述べたように保守主義が台頭する時代にあって、自由教育を標榜する当該施設で人間形成に携わることをどのように考えていたのか。こうした点を単に事実による後付けではなく、実際の講演や学生たちとの対話記録など思想面から明らかにする必要がある。そうすることにより、自由主義と保守主義の問題だけにとどまらない、真に人間形成のあるべき姿、人間形成に関する思想が明確になると思われるため、今後の検討課題としたい。

## 注

- 1 『現代スペイン情報ハンドブック』 p.239によれば、1860年の段階におけるスペインの非識字率は男性で64.9%、女性で85.9%である。
- 2 自由主義的理念に基づいたスペイン最初の憲法として「カディス憲法」が制定された。
- 3 「第一次大学問題 (1868年)」および「第二次大学問題 (1875年)」の二度にわたり、大学からの教員の追放と復帰を繰り返した。
- 4 ドイツ人哲学者、カール・クリスティアン・フリードリッヒ・クラウゼの提唱する万有在神論がスペインに導入され、クラウゼ主義としてこうした人間形成の場に大きな影響を与えた。
- 5 「1898年の世代」については、ベドロ・ライン・エントラルゴ著、佐々木孝他訳『スペイン一八九八年の世代』(れんが書房新社、1986年)において思想面から詳細に扱われている。
- 6 Abellán, *Ortega y Gasset y los orígenes de la transición democrática*, pp.51-52.
- 7 Ortega, *Obras completas I*, p.322.

- 8 オルテガ著 桑名一博訳『オルテガ著作集2』 pp.256-361.
- 9 同誌(原題: *Revista de Occidente*) は内戦後、再び刊行されて現在に至る。
- 10 様々な翻訳本が存在するが、本稿では白水社の『オルテガ著作集』を挙げておく。
- 11 前掲書 pp.58-59.
- 12 オルテガの一般教育思想を巡っては拙稿、「大学論におけるオルテガ」を参照されたい。
- 13 前掲書 pp.179-252.

### 参考文献

- José Luis Abellán, *Ortega y Gasset y los orígenes de la transición democrática*, Espasa Calpe, 2000.
- José Ortega y Gasset, *Obras completas I*, Alianza Editorial, 1983.
- 川成洋他編『スペイン文化事典』丸善 2011年
- 木下智統「大学論におけるオルテガ」『金城学院大学論集』社会科学編13(1) 2016年 pp.130-139.
- オルテガ著 井上正訳『大学の使命』桂書房 1968年
- 桑名一博訳『オルテガ著作集2』白水社 1998年
- 戸門一衛他編『現代スペイン情報ハンドブック』三修社 2007年
- 渡辺 修『オルテガ』清水書院 1996年